やりたい気持ちが膨らむように

～進んで取り組む支援の工夫～

田　中　祐　子

はじめに

R子は、おとなしそうに見えた。少しでも大きな声や音がすると顔をかくしてじっとしてしまう。友だちがにぎやかに遊んでいるときにも、一人でおもちゃをつついていることが多かった。そこで、興味を引きそうな素材をいろいろ提示したり、友だちの遊びに誘ったりしてみたが、少し試してみただけで、または始めから「いやだ」と顔を背けることが多かった。ある日の事、クラスの友だちは外で自転車に乗って遊んでいた。いつもなら一人遊具で遊んでいるR子が自転車小屋にいる。R子は片っ端から自転車などの車にまたがり、自分の乗れるものを探していた。誰の手も借りずに。滅多に見られないR子の必死な姿であった。「みんなと同じことをして遊びたい」R子の切実な思いが胸を打った。

R子はただのおとなしい子ではなく、「思い」を持っていながらうまく意思表示したり行動化したりできずにいるのだ。そんなR子が自分の「思い」を膨らませ、進んで活動し満足感を得るためには、教師の細やかな支援が必要である。ここでは、進んで取り組もうとするR子の姿を求めて工夫していった支援の方法を中心に述べてみたい。

1　プロフィール

(1) 生育歴

・昭和63年３月生　９歳９か月　小学部４年生　女子　ダウン症候群

・精神薄弱児通園施設を経て本校に入学

(2) 諸検査による実態

表－11　遠城寺式乳幼児発達診断検査（H.9.5 月実施）

移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
2:6～3:4	2:6～2:9	2:9～3:0	2:3～2:6	1:9～2:0	2:0～2:3

表－12　新版Ｋ式発達検査（H.9.2 月実施）

認知・適応(C-A)	言語・社会(L-S)	全領域
２：２	１：９	１：１１

(3) 生活を楽しんでいる姿、楽しめない姿および行動特性

・歌や踊りが好きで、リズムに合わせて楽しんで踊る。

・自分なりにできそうだと見通しが持てる活動には意欲を持って取り組み、楽しんですることができるが、できないと自分で判断してしまうと、意欲をなくしてしまいがちである。

・大きな声や音を嫌い、それだけで意欲をなくしてしまう。

・慣れた友だちや大人と楽しんで関わりを持とうとする。

2．取り組みの構想

(1) めざしたい姿　　自分から進んで思いを表したり、活動を楽しんだりする。

(2) 指導仮説

自我の拡大期にあるＲ子は、成功体験をどんどん積んでいくことで、よりよい自分をつくり上げていくことが大切である。しかし、ささいな事でつまずき、持てる意欲や力を十分に発揮できていないのが現状である。Ｒ子のやりたい気持ちを達成感・成就感につなげていくためにはまず意欲が十分に高まるような題材の選定や、状況づくりが大切である。そして、最近接領域を見極めた上での適切な課題の設定と、臨機応変に対応する教師の姿勢、本児のやる気を損わないような支援が不可欠である。そうして「できた」経験、満足感を積み上げていく事が、自己有能感を育て、肯定的な自己をつくり上げていくことにつながっていくものと考える。教師がＲ子に対する支援の工夫をしていくことで、本児が少しでも進んで思いを表したり、活動を楽しんだりする姿が多く見られるようになるものと考える。

(3) 指導の方針

・本児が安心して活動できる落ち着いた環境を設定する。
・待つ姿勢を大切にし、本児の思いを尊重する。
・視覚に訴える教材や具体物を提示することで、活動の内容を分かりやすく、見通しを持ちやすくする。
・同じ活動を繰り返しすることで活動の流れが分かるようにし、意欲につなげる。
・意欲を持って取り組めるためのより実態に沿った教材を選定し、本児のやる気を損なわないような支援の内容と方法を工夫する。
・適切な意思表示の方法をそのつど示し、定着を図る。

3．指導の実際

ここでは、Ｒ子が楽しんで取り組んでいった題材や活動とそれに対する支援について書いてみたい。

(1) 制作活動における実践～主にPLANの段階の支援を中心に～

Ｒ子は、手指の巧微性が十分に育っておらず、操作活動の範囲は限られているものの、制作に関する活動は好きである。また人や物に対する思いは深く、意欲付けの段階での支援により、楽しんで取り組み、作り上げた喜びを味わうことができやすいと考えた。

［ペーパーフラワー（母の日のプレゼント）］

PLANの支援	DOの支援	Ｒ子の様子
・大好きなおかあさんにプレゼントするという設定そのもの。 ・多少失敗してもわかりにくい素材（お花紙）にした。 ・作り方を決めず、実態に応じて自由に変えるようにした。	・お母さんの写真（拡大したもの）を掲示し、目標を明確にすることで作りたい気持ちを盛り上げる。 ・作りたい花の色を自分で選び、「わたしの」という思いが高まるようにする。 ・紙を折るとき、はさみで切れ目を入れるとき、大きく曲がらない程度に背後から手を添える。 ・手でちぎりやすいよう、紙を重ねる枚数を 4枚から 2枚に減らす。	・写真を見ただけで目が輝き、嬉しそうにする。教師の誘いかけにうなずき、意欲欲を示した。 ・予想通り好きな赤を選び、紙を受け取ると進んではさみを持ってきた。 ・はさみを使うときに手を添えられるのを嫌がるので、手でちぎって切れ目を入れることにした。端までちぎってしまうこともあったがそれも認め、花の部品として生かすようにしたところ、意欲的に取

	・セロハンテープをあらかじめ切っておきすぐに使えるようにする。 ・セロハンテープの裏表の判別が不確実であるため、テープを持つ手の持って行き方をそのつど動作で示す。	り組んだ。 ・時々、テープがねじれることがあったがだいたいうまく貼ることができた。
・作った日の下校時、迎えに来たお母さんに渡すという設定にし、そのときを楽しみに作りたいという気持ちを盛り上げた。	・「できたらあげようね」などと時々声をかけ、気持ちが持続するようにする。 ・できた花はレースペーパーでくるんで花束にし、完成を意識できやすくする。	・数分間であったが、集中して最後まで取り組めた。 ・完成した花を見て笑顔が出る。大切そうにそおっと持ち、ロッカーにしまう。 ・下校時、お迎えがお父さんだったため、不機嫌になる。

R子にとって、「援助されている」と感じることが予想以上に意欲の減退につながることが分かった。この題材では、おかあさんへのプレゼントという強い動機に支えられ、はさみを使う場面での気持ちのつまずきを乗り越え、最後まで作ることができたが、さりげない支援の方法をさらに工夫する必要を感じた。

ベーコンを切るR子

(2) 調理活動における実践～DOの段階の支援

調理は、目的が明確であるため見通しが持ちやすく、楽しんでできる活動である。その中で本児が「こねる」、「切る」、などの活動を意欲的にするための実態に応じた支援について、学習の展開に沿って書いてみたい。

［ピザづくり］

R子の実態	DOの支援	R子の様子
・味のはっきりしたものを好む傾向があり、ピザは好きなことが予想される。	・ピザの上に乗った材料が分かるように大きく描いた絵を提示し、見通しを持つことで意欲が高まるようにする。	・「ピザ」の名前は知らなかったが、その物は知っており、目を見開いて絵を見ていた。
・材料の中で「トマト」は確実に知っているが、その他の物は不確実である。	・絵を見ながら材料の名前を確認し、確実に言える物の名前を問いかけることで、自信を持って発表ができるようにした。またそのことで、作りたい気持ちを盛り上げる。	・「トマト」の名前を問いかけると、口は動いたものの発声がなかったため、教師が近くに寄って口型を示しながらゆっくり言ってみた。小さい声で「トマト」と答え、満足げであった。
・他の児童のささいな行動や発声で、意欲が失われることがある。	・個人机を消毒して作業台とし、自分の作業に没頭できるようにする。	・他の児童との距離が保たれたため、落ち着いて作業に取り組めた。
・握力が弱いため、軽くて切れやすい道具と素材を用いる必要がある。また、手にしたものを口に持っていきがちなので、安全な道具でなくてはならない。	・上に乗せる材料を切るとき、ステーキナイフを使うことで、簡単で安全に作業できるようにする。 ・1cm 角程度の棒状に切ったにんじんをあらかじめ軽くゆでておき、簡単に切れるようにする。	・作業の内容が分かると、全体への声かけだけでさっと手洗いをすませて着席し、意欲を見せていた。 ・切る幅はまちまちだが、意欲的にどんどん切り進めていった。
・ナイフの刃と背の判別が難しい。	・ナイフの背にカラーテープを張り、目印とする。	・初めは正しく使っているが、少し切りにくい場面があると、反対側で試してみるようである。そのつど声をかけているが、度重なると嫌な顔をした。
・切りやすい姿勢を取ろうとすることは難しいが、作業前に声かけすれば、ほぼその姿勢を保って作業ができる。	・切り始めのときに、「こっちの手でナイフを持ってね、こっちでにんじんを押えてね」と声をかけながらそっと手を添え切りやすい姿勢をとれるようにする。	・ほぼ始めの姿勢を保って作業を続けることができた。

・自分の好きな肉（ベーコン）友だちが切っていると、「ああー」という顔をしてじっと見ている。 ・感触遊びが好きであり、パン生地をこねる活動を楽しんですることが予想される。	・「自分もしたい」という気持ちを大切にするため、ベーコンを切る活動を取り入れ意欲を盛り上げる。 ・「やった、切れた」と身振りを交えて声をかけ、本児と喜びを共感した。 ・「ピザさん、ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ」とリズミカルに歌いながら作業することで、楽しんでできるようにする。 ・生地を伸ばすところでは、教師が歌に合わせて生地をたたく動作を示し、伸ばすことがイメージできなくても作業を進められるようにする。	・ベーコンを差し出すと、喜びの表情に変り、意欲的に切り始める。切りにくそうにしていたが敢えて見守っていると、ちぎるように切り、「出来た」の表情。 ・教師の声に合わせて笑顔でポーズ。 ・歌に合わせて軽く体を揺すりながらパン生地をこねた。 ・生地を叩く感触が楽しい様子で、どんどん伸ばしていった。

できる活動の範囲がまだ狭いＲ子だが、課題を絞って支援していくことでその範囲を広げ、自分なりの達成感を持つことができた。

(3) **係活動における実践**～役割を持つことを自信につなげるために～

〔ごはん・パン係〕

関連のある活動を繰り返すことで、自分の係として定着しやすくする。

	活　動　内　容	支　　援
朝の会	・献立調べの時、ごはんまたはパンのカードを持ってみんなに知らせる。	・発表の際、教師が口型を示しながら一緒に言うことで、自信を持って言えるようにする。
給食前	・朝の会で使ったカードをランチルームまで運び、給食黒板にはる。	・磁石付きの絵カードを準備し、掲示しやすくするとともに、活動の内容を意識できるようにする。
給食時	・ごはん、またはパンをみんなに配る。	・人数分のごはん、またはパンを渡し、初めは一つ一つトレーを指差して、慣れたら「○○さんへどうぞ」と声をる。

Ｒ子は、始めは見通しが持てず、進んですることもなかったが、繰り返すうちに次第に自分の役割として意識できるようになってきた。二学期以降は、発表の場になると進んで立ち上がったり、カードを自分から運んだりする姿が見られだした。定着はゆっくりだが長期間繰り返すことで確実に身につき、その自信が本児の進んで取り組む姿に結び付いていくことを実感した。

４．反省と今後の課題

この実践を通じて、本児が持っている意欲や力を十分に発揮できるような支援がいかに大切であるかを実感した。「できる状況づくり」をして「できた」経験を積み重ねていくことが今のＲ子にとっては大切であり、今後もより細かく実態を見つめながら支援の工夫をしていきたいと考える。しかし、「できる状況」を整えすぎることで今の発達段階を乗り越えていくための活動が準備しにくい面もある。Ｒ子のように、抵抗感が意欲を阻害しがちな児童への適切な課題設定と支援の在り方を、更に探っていきたいと考えている。